

「二百十日のころ」

大庭 みな子

終戦の年、二百十日が近づくころ、わたしは広島で原爆後の救助作業に従事していた。

当時、わたしは爆心地からは三十キロばかり離れた今の東広島市西条にあった女学校の三年生だった。八月六日の原爆で、広島は瞬時にして壊滅の状態だったのだ、戦禍を免れた近郊の地区の学生たちが動員されて救護作業に当たることになった。八月十五日の終戦までは、まだ各地で空襲も続いていたし、広島は運命は、今日のが身のことやも知れず、人びとは救護のために被災地にかけつけることもできなかった。

広島に救援活動に出かけたのは多分八月二十日ごろだったように思う。二百十日が過ぎるころまで広島にいて、指折り数えて、二週間だ、と思った記憶がある。

女学生たちはいくつかの班に分かれて、わたしが配属されたのは、爆心地にいちばん近い本川小学校の救護所だった。救護所といっても、コンクリートの箱の残骸といった小学校の建物の中に三百人ほどの被爆者たちが、ごろごろと寝ているだけのものであった。

女学生の役目は毎日校庭でおふる桶ほどもある大きな鉄の鍋に雑炊を炊き、それをバケツに入れて一杓子ずつ患者たちに配ることだった。

この三百人の被爆者たちはほとんどが重症で、意識も半分わからず、したがって

引きとる近親者もない人たちがばかりなのだ。患者の火傷は被爆後何週間かたつうちに膿みただれて、真っ黒にハエがたかり、傷口には無数のウジがうごめいていた。被爆者は毎日、数人ずつ死んで行った。死ぬと、校庭の隅に掘った穴で油をかけて焼いた。朝、雑炊を配ったときはまだ息のあった人が昼には死んでいる、というようなことが毎日続いていた。

原爆に関する情報も、一般の人たちは、恐ろしい威力を持つ新型爆弾らしいというくらいで、残留放射能というような知識さえなかった。

わたしたちは、毎日雑炊をつくるために、焼け野原にしつらえられた水道のある洗い場で、お米をといだり、野菜を洗ったりするのだったが、見まわすと、辺り一面白骨が散らばっているのであった。猛火に焼かれて、もう半月以上もたっているのだから、みんな骨になってしまったのだと思い、少女たちは、洗い場のほとりにある人間の骨を眺めた。関節のある手や足の骨、ときにはぎよっとする頭がい骨もあった。

白骨の原はどこまでも続いていた。当時、爆心地に近いその辺りを、人の骨を踏まずに十メートルと歩くことはできなかった。瓦の下に、ねじれたガラスの下に、それらは肉を失ってまき散らされた白い貝殻のようにも見えた。

本川小学校から広島街を見まわすと、海まで瓦礫の原が続いていた。わずかに形を残している鉄骨の建物が、ああ、あれは福屋だ、芸備銀行だというふうに、昔の街角をわからせてくれたが、こんなふう的一面に焼けた街では、生まれて住んだ家を見つけることも難しい。

復員してきた兵隊さんたちが焼け跡にうずくまって、途方に暮れている姿がよくあった。どうやら自分の家があったらしいところに散らばっている骨を拾い集めて、ハンケチに包んでいる人もいた。

わたしはジャガイモの皮をむきながら、お米を洗いながら、お米のとき汁が目の前に散らばっている白骨の方に流れてゆくのを眺め、そして、人の骨にジャガイモの皮がまつわるのを見つめ、この炊いた雑炊を配る患者たちのことを思った。ウジに覆われた、生きていいのか死んでいるのかわからない、けれど、近日中に必ず死ぬであろう被爆者たちのことを思った。

雑炊を炊き終わって、バケツに盛り分けたあとの鍋の底には、おこげがこびりつく。すると、それまで遠巻きに眺めている比較的軽症の人たちがわっと走り寄って、ガリガリと音を立ててこそぎ落として食べる。

決して忘れることのできないそれらの情景は、物心ついて以来の戦争にまつわる数数の場面の中心に今もうごめいている。それは書物の中、小説の中で出会った人の世の話につながり、果てはその昔、いったいどこからやって来て、どこへ行くのか決してわかりはしないが、どこまでもどこまでも行き続けるに違いない人の影、大きな黒い人の影、つまりわたしの文学の芯になっている。

二百十日がやって来ると、ガラス戸もない教室に吹き込む暴風雨に打たれて眠った夜のこと、闇の中で燃える燐のようによみがえる。